様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月 １６ 日現在

機関番号：３７７０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１３１７

研究課題名（和文）田島道治文書の分析と研究―象徴天皇制形成期の天皇と宮中―

研究課題名（英文）Analysis and research of Michiji Tajima's Documents: The Emperor and the Imperial Court during the Formation Period of the Symbolic Emperor System

研究代表者
茶谷　誠一（Seiichi, Chadani）

志學館大学・人間関係学部・教授

研究者番号：３０４６０００９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,000,000円

研究成果の概要（和文）：　戦後、初代宮内庁長官を務めた田島道治文書の分析を行い、史料原本からの翻刻、編集を経て、資料集の体裁に整えたうえで必要な補注作業も行った。その研究成果として、研究者全員の編集者名で『昭和天皇拝謁記』全7巻（岩波書店、2021年～2023年）として刊行した。
　さらに、2023年9月には研究成果報告会としてシンポジウム「昭和天皇と現代日本」を一般参加形式にて開催したほか、研究者による学会報告、学術雑誌や新聞などで研究者各自による寄稿、インタビュー記事も発表、掲載してきた。
　歴史的価値が非常に高い史料を活字化して公刊した研究上の意義は大きく、今後の研究財産となっていくはずである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　これまでの象徴天皇制研究では、天皇や宮中の動向を追える国内資料が乏しく、アメリカやイギリスの新規公開の外交文書などに頼ってきた側面があった。今回刊行した『昭和天皇拝謁記』は海外頼みの研究傾向を一変させ、史料環境を大いに改善することは確実である。
　また、『昭和天皇拝謁記』には天皇と田島の会話が詳細に書き留められており、昭和天皇の実像を詳細かつ明確に追うことができるようになった。このことにより、今後、象徴天皇制研究全体を進展させる学術的貢献が期待される。同時に、象徴天皇制形成期の動向が一般にも把握できるようになることで、その社会的意義も大きなものとなるであろう。

研究成果の概要（英文）：The research subject of our study group is newly found historical materials left by Tajima Michiji, who served as the first head of the Imperial Household Agency　after the World War II. Our work of analyzing them, transcribing them from original documents, editing them, and adding annotation to them finally led to the publication of 7 volume of books, titled The Dialogue between Emperor Hirohito and Michiji Tajima (Iwanami Shoten, 2021-2023). All the researchers of our study group served as co-editors of these books, which are of highly academic significance.
We have also been involved in disseminating the academic outcome of our study not only to the academic circle but also to the public though such opportunities as academic conferences, paper publications, contributed press articles, and interviews. In September 2023, we held a public symposium titled ‘Emperor Hirohito and Modern Japan’.

研究分野：日本近現代史

キーワード：象徴天皇制　昭和天皇　宮内庁　戦争責任　戦後日本

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

戦後の象徴天皇制研究は、戦前までの明治憲法下の近代天皇制研究と比較して著しく遅れている状況にある。その最大の理由は資料環境の劣悪さにあり、天皇や宮内官僚の肉声を伝える一次資料が極めて少ない現状である。これまで、昭和天皇の肉声や動向を伝える資料として『昭和天皇独白録』（1990）、『昭和天皇実録』（2015-2019）が刊行されているが、資料自体の作成経緯や編集方針に特定の意図がこめられており、天皇自身の思想や考えをうかがわせる記述も断片的である。また、天皇に仕えた側近や政治家の日記や回想も刊行されているが、こちらも木下道雄の『側近日誌』（1990）、芦田均の『芦田均日記』（1986-1992）、徳川義寛の『徳川義寛終戦日記』（1999）など、天皇の言動に関する記述は要職在職期間のみと、かなり限定的である。象徴天皇制研究を進捗させていくうえにおいて、質の高い資料の利用は分析過程上、必須の作業となる。

このような資料状況において、田島道治資料の「拝謁記」は、宮内庁長官在職期間のほぼ全体にわたって天皇の肉声を書き残しており、従来の公的資料や側近らの日記と比較しても圧倒的な分量と資料価値を有している。「拝謁記」は田島が天皇に拝謁した直後に天皇との問答内容を書き留めており、天皇と田島との間の生々しいやりとりが記述されている。同じく「日記」も宮内庁長官としての業務内容を日々、手帳の余白がないほどに書きこんでいる。本研究が研究課題とした初代宮内長官田島道治の資料は戦後の象徴天皇制研究の質を一気に飛躍させる価値を有しており、研究の学術的、社会的意義は非常に大きなものとなることが予想される。また、これら一連の資料群が出版されれば、学界だけでなく一般社会からも関心を集めることは必定である。

２．研究の目的

本研究では、初代宮内庁長官として約 5 年半にわたって天皇に仕えた田島道治がのこした資料群を、原文から翻刻して編集、出版することを主目的とし、合わせてシンポジウムの開催や解説書の刊行を通じ、象徴天皇制研究の水準を一気に高めることをめざした。具体的には、以下の 3 点を目的に掲げてその達成を期した。

① 初代宮内庁長官に就任した田島道治の貴重な資料群（拝謁記、日記、関係文書）を原文から翻刻、編集、出版する。

② この資料群を分析してシンポジウムの開催、解説書の分担執筆をおこない、いまだ不明な点が多く残る象徴天皇制形成期の実態解明をめざす。

③ 資料群にあらわれる昭和天皇の肉声を通し、過去の戦争観、新憲法観、象徴天皇への模索といった点を明らかにしつつ、憲法改正問題や皇位継承問題など今日生じている問題の根源を提示し、一般社会へその知見を還元する。

３．研究の方法

田島道治資料の編集作業に臨むにあたっては、次のような研究方法を立てて遂行していった。まず資料群のうち、「拝謁記」、「日記」、「関係文書」のそれぞれで、①原文翻刻、②原文照合、③補注追記、④解説執筆、の各作業を行ったうえで、⑤各巻単位での刊行、といった手順を立てた。分量が多く史料的価値の高い「拝謁記」の解析を優先的

に行って、これを 5 巻分にまとめた。次に「日記」を６巻と７巻に収録し、雑多な文書が混在していた「関係文書」については収録する文書を資料群から選定したうえ、最終巻に収録した。

一連の解析作業のうち、手間と時間のかかる①翻刻、③補注の作業については、崩し字の読解能力のある大学院生、知人の研究者数名にアルバイトを依頼した。

②原文照合では正確性を期すため、本研究メンバーが各巻のメイン監修役となって作業を進めた後、最後には不読箇所や要検討箇所について、６人の本研究メンバー全員と版元の編集担当者、研究協力者、遺族で史料所蔵者の田島家の方々にも加わってもらって原稿を固めていった。

③、④の作業は「拝謁記」１巻～５巻までについて研究メンバーが各編集責任者となって作業を進め、解説執筆も交代で担当した。いずれの工程でも当初予定していた一堂に会しての編集会議がコロナ禍で困難となり、オンライン会議に切り替えての進行となったために一時は作業進捗が大幅に滞った。しかし、作業方法をオンライン中心方式に切り替えて研究者がそのスタイルに慣れたこと、作業の遅れを取り戻すために研究メンバーや研究協力者、版元の編集担当者らが奮闘したことにより、申請時に予定していた研究計画を遂行することができた。この間、研究協力者の吉見直人が遺族や原本寄託先の国会図書館憲政資料室職員との折衝役を務め、研究の円滑な遂行に協力いただいた。

４．研究成果

本研究における研究成果は以下の通りである。研究成果は研究実績報告書の「研究発表」欄の項目にもとづき、雑誌論文（学術論文のほか、研究ノートや史料紹介、コラムなどその他も記載）、学会発表、図書の順で、経年ごとに成果内容を記載した。このうち、メインの研究成果となる古川隆久・茶谷誠一・冨永望・瀬畑源・河西秀哉・舟橋正真編『昭和天皇拝謁記』全 7 巻（岩波書店、2021 年～2023 年）が 2023 年の第 77 回毎日出版文化賞（企画部門）を受賞した。このほか、列挙は控えるが、全国主要紙を中心に新聞、雑誌などに本研究の成果である『昭和天皇拝謁記』を紹介した記事や寄稿が多数掲載されたことを付記しておく。

〔雑誌論文：学術論文〕

・瀬畑源「敗戦直後の宮内省の天皇制政策― 昭和天皇「戦後巡幸」前期(1946 年)に焦点をあてて―」
（『日本史研究』第 702 号、2021 年 2 月）31－54 頁。

・舟橋正真「昭和天皇の戦後皇族像―『昭和天皇拝謁記』にみる弟宮への視線―」
（『日本歴史』第 896 号、2023 年 1 月）91－98 頁。

・冨永望「昭和天皇の退位問題再論―田島道治関係文書を手がかりに―」
（『日本史研究』第 739 号、2024 年 3 月）80－100 頁。

〔雑誌論文：その他〕

・舟橋正真「三笠宮外遊：留学への志向 」
（『学習院大学史料館 ミュージアム・レター』第 49 号、2022 年 9 月）6 頁。

・古川隆久「ある日の「拝謁記」」

（『図書』第 886 号、2022 年 10 月）1 頁。
・河西秀哉「『昭和天皇拝謁記』の画期性」
（『日本史研究』第 737 号、2024 年 1 月）41－54 頁。
・茶谷誠一「『拝謁記』にみえる昭和天皇の「心」の問題」
（『日本歴史』第 912 号、2024 年 5 月予定）掲載頁未定。
・瀬畑源「『昭和天皇拝謁記』を読む―昭和天皇と田島道治は何を語り合ったのか―」
（『歴史科学』第 257 号、2024 年 5 月予定）掲載頁未定。

〔学会発表〕※シンポジウム含む
・瀬畑源「敗戦直後の宮内省の天皇制政策― 昭和天皇「戦後巡幸」前期(1946 年)に焦点をあてて―」
（日本史研究会全体会、2020 年 10 月 10 日）
・河西秀哉「皇室財産はどのように見られているのか」
（法制史学会近畿部会、2022 年 9 月 10 日）
・舟橋正真「三笠宮の近現代史―「童謡の宮様」から「学者皇族」まで―」
（第 95 回学習院大学史料館講座 令和４年度秋季特別展「ある皇族の１００年－三笠宮崇仁親王とその時代－」2022 年 10 月）
・瀬畑源「行幸の形式化と地域―戦後巡幸中期、関西巡幸（1947 年）に焦点をあてて―」
（象徴天皇制研究会、2022 年 10 月 15 日）
・河西秀哉「日本近現代史特に象徴天皇制研究からのコメント」
（科研費補助金基盤研究 A「共和政の再検討：近代史の総合的再構築をめざして（代表：中澤達哉）」研究会、2022 年 10 月 23 日）
・瀬畑源「『昭和天皇拝謁記』を読む―昭和天皇と田島道治は何を語り合ったのか―」
（外交史研究会、2022 年 11 月 17 日）
・瀬畑源「『昭和天皇拝謁記』を読む―昭和天皇と田島道治は何を語り合ったのか―」
（大阪歴史科学協議会、2022 年 12 月 11 日）
・古川隆久、茶谷誠一、冨永望、瀬畑源、河西秀哉、舟橋正真、吉見直人
「昭和天皇と現代日本―『昭和天皇拝謁記』から考える―」
（科研費研究成果報告シンポジウム、2023 年 9 月 9 日）
・冨永望「昭和天皇の退位問題再論―田島道治関係文書を手がかりに―」
（日本史研究会大会、2023 年 10 月 7 日）

〔図書〕
・古川隆久・茶谷誠一・冨永望・瀬畑源・河西秀哉・舟橋正真編『昭和天皇拝謁記』全 7 巻（岩波書店、2021 年～2023 年）304 頁、312 頁、303 頁、297 頁、320 頁、336 頁、260 頁。
・河内春人・亀田俊和・矢部健太郎・高尾善希・町田明広・舟橋正真『新説の日本史』（SB クリエイティブ、2021 年）248 頁。
・三笠宮崇仁親王伝記刊行委員会編『三笠宮崇仁親王』（吉川弘文館、2022 年）1332 頁。
・岩城卓二・上島享・河西秀哉・塩出浩之・谷川穣・告井幸男編『論点・日本史学』（ミネルヴァ書房、2022 年）388 頁。

・片山慶隆・山口航編『Q&A で読む日本外交入門』（吉川弘文館、2024 年）248 頁。
・三谷隆信（解説：古川隆久）『侍従長回顧録』（中央公論新社、2024 年）328 頁。
・古川隆久・茶谷誠一・冨永望・瀬畑源・河西秀哉・舟橋正真『「昭和天皇拝謁記」を読む』（岩波書店、2024 年夏予定）総頁数未定。

以　上

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 冨永望	４．巻 739
２．論文標題 昭和天皇の退位問題再論―田島道治関係文書を手がかりに	５．発行年 2024年
３．雑誌名 『日本史研究』	６．最初と最後の頁 80-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 河西秀哉	４．巻 737
２．論文標題 昭和天皇拝謁記』の画期性	５．発行年 2024年
３．雑誌名 『日本史研究』	６．最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 茶谷誠一	４．巻 912
２．論文標題 『拝謁記』にみえる昭和天皇の「心」の問題	５．発行年 2024年
３．雑誌名 『日本歴史』	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 瀬畑源	４．巻 257
２．論文標題 『昭和天皇拝謁記』を読む―昭和天皇と田島道治は何を語り合ったのか	５．発行年 2024年
３．雑誌名 『歴史科学』	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 舟橋正真	4．巻 49
2．論文標題 三笠宮外遊ー留学への志向」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『学習院史料館ミュージアム・レター』	6．最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 舟橋正真	4．巻 896
2．論文標題 昭和天皇の戦後皇族像ー『昭和天皇拝謁記』にみる弟宮への視線	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『日本歴史』	6．最初と最後の頁 91-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古川隆久	4．巻 886
2．論文標題 ある日の「拝謁記」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『図書』	6．最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 冨永望
2．発表標題 昭和天皇の退位問題再論―田島道治関係文書を手がかりに―
3．学会等名 日本史研究会大会
4．発表年 2023年

１．発表者名 舟橋正真
２．発表標題 三笠宮の近現代史：「童謡の宮様」から「学者皇族」まで
３．学会等名 第95回学習院大学史料館講座 令和４年度秋季特別展「ある皇族の１００年－三笠宮崇仁親王とその時代－」
４．発表年 2022年

１．発表者名 瀬畑源
２．発表標題 行幸の形式化と地域―戦後巡幸中期、関西巡幸（1947年）に焦点をあてて
３．学会等名 象徴天皇制研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 瀬畑源
２．発表標題 『昭和天皇拝謁記』を読む―昭和天皇と田島道治は何を語り合ったのか
３．学会等名 外交史研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 瀬畑源
２．発表標題 『昭和天皇拝謁記』を読む―昭和天皇と田島道治は何を語り合ったのか
３．学会等名 大阪歴史科学協議会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 河西秀哉
２．発表標題 皇室財産はどのように見られているのか
３．学会等名 法制史学会近畿部会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 河西秀哉
２．発表標題 日本近現代史特に象徴天皇制研究からのコメント
３．学会等名 科研費補助金基盤研究A「共和政の再検討：近代史の総合的再構築をめざして（代表：中澤達哉）」研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計12件

１．著者名 古川隆久・茶谷誠一・冨永望・瀬畑源・河西秀哉・舟橋正真編	４．発行年 2023年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 260
３．書名 『昭和天皇拝謁記』第7巻	

１．著者名 片山慶隆・山口航編	４．発行年 2024年
２．出版社 『Q&Aで読む日本外交入門』	５．総ページ数 248
３．書名 吉川弘文館	

１．著者名 三谷隆信（解説：古川隆久）	４．発行年 2024年
２．出版社 中央公論新社	５．総ページ数 328
３．書名 『侍従長回顧録』	

１．著者名 古川隆久・茶谷誠一・冨永望・瀬畑源・河西秀哉・舟橋正真	４．発行年 2024年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 -
３．書名 『「昭和天皇拝謁記」を読む」』	

１．著者名 古川隆久、茶谷誠一、冨永望、瀬畑源、河西秀哉、舟橋正真	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 316
３．書名 『昭和天皇拝謁記』第3巻	

１．著者名 古川隆久、茶谷誠一、冨永望、瀬畑源、河西秀哉、舟橋正真	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 310
３．書名 『昭和天皇拝謁記』第4巻	

1．著者名 古川隆久、茶谷誠一、冨永望、瀬畑源、河西秀哉、舟橋正真	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 332
3．書名 『昭和天皇拝謁記』第5巻	

1．著者名 古川隆久、茶谷誠一、冨永望、瀬畑源、河西秀哉、舟橋正真	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 348
3．書名 『昭和天皇拝謁記』第6巻	

1．著者名 三笠宮崇仁親王伝記刊行委員会編	4．発行年 2022年
2．出版社 吉川弘文館	5．総ページ数 1332
3．書名 『三笠宮崇仁親王』	

1．著者名 岩城卓二・上島享・河西秀哉・塩出浩之・谷川穣・告井幸男編	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 388
3．書名 『論点・日本史学』	

１．著者名 田島 道治、古川 隆久、茶谷 誠一、冨永 望、瀬畑 源、河西 秀哉、舟橋 正真、NHK	４．発行年 2021年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 304
３．書名 拝謁記1 昭和24年2月～25年9月	

１．著者名 田島 道治、古川 隆久、茶谷 誠一、冨永 望、瀬畑 源、河西 秀哉、舟橋 正真、NHK	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 304
３．書名 拝謁記2 昭和25年10月～26年10月	

〔産業財産権〕

〔その他〕

昭和天皇「拝謁記」　―戦争への悔恨―
https://www3.nhk.or.jp/news/special/emperor-showa/?tab=1&diary=1

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	瀬畑　源 (Sebata Hajime) (10611618)	龍谷大学・法学部・准教授 (34316)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	河西　秀哉 (Kawanishi Hideya) (20402810)	名古屋大学・人文学研究科・准教授 (13901)	
研究分担者	冨永　望 (Tominaga Nozomu) (20572069)	公益財団法人政治経済研究所・その他部局等・研究員 (72613)	
研究分担者	舟橋　正真 (Hunabashi Seishin) (20790968)	公益財団法人政治経済研究所・その他部局等・研究員 (72613)	
研究分担者	古川　隆久 (Hurukawa Takahisa) (70253028)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	吉見　直人 (Yoshimi Masato)		
研究協力者	飯島　直樹 (Iijima Naoki)		
研究協力者	馬塚　智也 (Maduka Tomoya)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	松田　克洋 (Matsuda Katsuhiro)		
研究協力者	山本　真己 (Yamamoto Masaki)		
研究協力者	水野　善斗 (Mizuno Yoshito)		
研究協力者	太田　聡一郎 (Ohta Souichirou)		
研究協力者	望月　幸輝 (Mothizuki Kouki)		
研究協力者	市川　周祐 (Ichikawa Shusuke)		
研究協力者	大窪　有太 (Ohkubo Yuuta)		
研究協力者	ドゥイカヒョ・ヌグロホ　プラヨギ (Dwicahyo Nugroho Prayogi)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	後藤　悠一 (Goto Yuichi)		
研究協力者	塚田　安芸子 (Tsukada Akiko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関